中学２年生

2004年度中学二年総合人間科の取り組み
生命と環境―仲間と学び、自ら語る―

川合勇治・岡村　明
佐光美穂・原　順子
薫森英夫

【抄録】 2004年度の取り組みでは、フィールドワークを山場とする個人単位の課題探求活動を行ってきたここ数年のパターンから離れ、一年間をディベートと意見文まとめの学習活動で構成する新しいプログラムを実施した。一年の学習活動を通して、生徒たちは思考力やコミュニケーション力、そしてリサーチリテラシーに関する能力を向上させた。この年の取り組みを、完成段階に入った本校の総合人間科のプログラムに対する新しい形として提案したいと考えている。

【キーワード】 リサーチ・リテラシー　ディベート　意見文　思考力　コミュニケーション力

1　学習指導のコンセプトと指導体制

(1)学習指導のコンセプト

年度初頭に学年団で確認した大方針は以下のようなものである。

A　大テーマ「生命と環境」のもとに、年間をグループ学習で展開する
B　フィールドワーク主体で展開する現行の学習活動の問題点を改善する
C　ディベートにより、コミュニケーション能力およびリサーチ・リテラシーの向上をはかる

本年度の取り組みは、フィールドワーク（以下、ＦＷと略記する）を山場とする典型的な本校での年間学習の流れと異なっている。

まずＡについてだが、通例中学二年生では、グループ学習の形態を部分的に取り入れる時期はあっても、年間を通じてそうすることはあまりない。本年度、このような形にしたのは、本学年の生徒たちの状況から、他者と協力し合わなければならない場面をたくさん設ける必要を感じたという、生徒指導的な配慮による。

次にＢについてである。本校がこれまで取り組んできたＦＷの教育的効果を否定するわけではないが、時代の変化とともに、問題点も出てきている。ＦＷ主体の学習活動の問題点に次の５点を挙げる。

①全員同じ期間にＦＷを行わせることによる無理

生徒の立場から言えば、何月何日の前後一週間程度の間で、ＦＷをするということである。学校の活動である以上、制約があることはしかたのないことではあるが、ある一定の期間にＦＷを行わなければならないという時間的な制約から訪問先が見つからないことがある。また、時間的な制約から希望する訪問先が訪問できなく、不本意な訪問先を選んだり、既にアポイントメントが取れた他の生徒と「相乗り」の形を取ったりせざるをえない。このようなＦＷでは、生徒のモチベーションの低さから受け入れ先にも大変失礼となりかねない。生徒にとって、ストレスフルな活動であると同時に、直前期の担当教員の負担も相当なものとなる。

②訪問先の対応の変化

総合学習が全国の学校で実施されるようになった。本校と同じような活動をする学校もあるためであろうか、かつては受け容れてくださっていた訪問先も、近年訪問希望者の増加を理由に、訪問を断られるケースも出てきている。

③テーマに応じた訪問相手を見付ける困難さ

「生命と環境」の場合、訪問相手が専門家になる場合が多いが、特に中学２年生の場合、生徒の発達段階から考え、本当にそこを訪問させるのが妥当か疑問が多い。

生徒の意識も高くなっており、総人創生期のように、専門家にお話を聞き、生き方を学ぶという意識ではなくなっている。つまり、非常に難しいテーマを扱いたがる傾向が顕著なのだが、実際には十分扱える力があるとは言い難い。こうした状況で専門家の元へ送り出すことは、双方のコミュニケーションが相当密に取れないかぎり、生徒にとって挫折感につながりかねない。

④外部との折衝の上での問題

本来なら教員が事前に訪問相手に打診し、学校長名義の依頼書を提出してから生徒と打ち合わせをさせるのが社会的な礼儀にかなった方法だが、本校ではいきなり生徒が連絡することが多い。そのため先方を困惑させることがある。またそのような方法が乱暴であると保護者からも批判が出ている。受け容れ拒否が多いのも、このような方法が原因であると推測される。

⑤研究方法が限定されやすいこと

本校でいうＦＷは、一般的な「ＦＷ」の概念をかなり限定して使用している。本来は現場に出て調査活動を行う方法を広く呼ぶものだが、本校の「ＦＷ」は、その中のインタビューという方法だけを指している。現場でのインタビューが生徒に与える教育的効果を否定するものではないが、研究テーマを追求する作業には他の手法も有効であることが多い。また、生徒にとっても利用できる研究方法が増えるのは有意義である。

大方針ＡとＢを受けて、学習活動を考えた結果、Ｃの項目でうたったディベートを採用することにした。ディベートという方法に関しては、小学校で学習したという生徒が概算で半分ほどいる。ディベートの試合そのものというより、試合のための事前調査や想定問答を創り上げる作業は、今後小論文やレポートを書く際、非常に有益と考えられる。ＡＯ入試や就職活動などを念頭に置いた、キャリア実現のためのスキル・トレーニングとして、ディベートを採用することにした。

⑵学年の指導体制

後に提示する表１「年間の学習の流れ」と併せてご覧いただきたいが、年間を４つのターム（期間）に分けて学習を進めた。と同時に、一学年80人の生徒を20人の学習グループに分け、年間を通しそのグループを固定して学習活動を展開した。１タームで１つの論題を学習してローテーションするので、生徒は年間４つの論題に取り組むことになる。

学年担当の教員は、１つの論題を通年担当して指導する。同じ論題を指導するのだが、生徒が次々と入れ替わっていくことになる。

学年の役割分担は次の通りである。

学習活動支援・指導…岡村、原、川合、薫森
立案・企画・運営　…佐光

このうち、学習活動支援・指導の担当者が、直接生徒の指導に当たった。「立案・企画・運営」担当は、年間計画やワークシートなどの準備、論題作りの指導、試合の台本や道具の整備などの他、国語の時間を利用して、ディベートそのもののルール説明、技術指導に当たった。さらに、隔週の総合人間科の時間だけでは予備調査が足りないため、クラス担任（岡村・佐光）は、ＨＲの時間などを利用して指導を行った。

学習支援・指導担当者は、一つの論題を通年指導担当する。教員を固定し、タームが変わるごとに生徒がローテーションしていくように組んだ。これによって教員の負担軽減を図った。なお、最終的に決定された４つの論題は、定義やプランを含めた正式な形では本稿３章⑴に挙げる。ここでは先に担当者を示しておく。

論題Ａ（介護問題）…薫森
論題Ｂ（自動ドア）…川合
論題Ｃ（輸入野菜）…原
論題Ｄ（不法投棄）…岡村

ディベートの方式に関しては、さまざまな形のものがあるが、全国教室ディベート連盟のものに準拠した。採用した理由は、中学生が授業の中で取り組んでいく事情にもっとも適したプログラムになっていることと、ビデオやワークシートなどの支援ツールが最も整っているためである。なお、授業作りに当たって参考にしたディベートの文献は、論文末に一括して掲げることにする。

⑶学習目標と評価の観点・評価の方法

個々の生徒の一年間の学習活動を、学年団全体の教員がタームごとに交代して見るので、評価の観点を統一する必要がある。そこで、年度初頭に、生徒の学習目標を以下のように定めた。

ａ「生命と環境」について必要な情報を組みたてて、論理的に物事を考えようとする
ｂ文献調査、インタビュー、アンケート、観察、実験などさまざまな調査方法を体験し、それぞれの長所を把握して使い分けようとする
ｃテーマに関して、自分の考えをまとめ、表現しようとする

この学習目標と対応させて、評価の観点は以下のようになった。

《目標ａに関して》
・ディベートの準備作業（立論の原稿作成）で、話し合いに積極的に参加し、チームの考えをまとめるのに寄与したか
・複数の考え方を意識しながら、より説得力のある考えを導き出したか

《目標ｂに関して》
・ディベートの準備作業（事前調査）で、必要な情報をそれに適した方法で集めることができたか
・ディベートの準備作業（事前調査）で、入手したデータを後で利用するために効果的に整理したか

《目標ｃに関して》
・ディベートの対戦で、他者の意見をよく聞いた上で、自分の考えを分かりやすくまとめて伝えたか
・ディベートのまとめ（個人で作成する意見文）で、自分の立場を定め、学習成果をふまえながら意見をまとめることができたか

こうした評価の観点に対して、各指導担当者は、作業状況や試合の様子、ワークシートや意見文の仕上がり具

合を見ながら評価を出す。評価は評定に利用できるよう、評定と同じＡＢＣ評価で提出する。全員の評価を合算して年間の評定とするため、各指導教員から出される各タームの評価は、Ａ～Ｃの中を＋－をつけることにした。また、それと同時に、評価の根拠として、簡単なコメント評価も添付することにした。

なお、この評価も、なるべく指導教員間で評価の格差が出ないように、ＡからＣと判断する際の目安となる学習の状況を提示したが、その具体的内容は割愛する。

2　１年間の学習活動

表１参照。なお、本稿第１章⑵で示したように、表に書かれたもの以外にも、各タームにつきほぼ２～３時間のＨＲの時間を、総合人間科の学習にあてた。

3　各学習活動とその指導の過程

⑴論題決定のプロセス

ディベートという学習活動の性質から、例年のように個人の興味のあるテーマを追究するわけにはいかない。そのことに生徒から不満がでるのはやむを得ない部分ではあるが、少しでも生徒の関心に寄り添った学習が可能になるように、①、②の二つの手続きを踏んだ。

①学年全員対象の論題アンケート

年度開始のオリエンテーションで、今年度の学習計画や学習活動について説明が済んだ段階で、学年全員を対象に、どんなことを論題にしたいかという内容のアンケートを採った。ディベートを体験したことのない生徒も半数いることを鑑み、「論題」の形でなくて、キーワードやトピックの形でも可とした。勿論、ディベートを体験してきている生徒からは、論題としてまとまったものも提出された。また、指導担当をする教員からも募った。以下に、論題の形で寄せられたものを中心に掲げておく。

食物、食の安全性に関するもの

・食の安全を守るために、日本はアジア地域から食料品を輸入するのをやめるべきか
・食料自給率を高めるために、日本は野菜の輸入を禁止すべきか
・家庭のゴミを減らすために、ハンバークは市販のものを買うべきか
・食物を長持ちさせるために、食品添加物の防腐剤を使うべきか
・しょうゆをこぼしたら、ティッシュでふくべきか、ぬれ雑巾でふくべきか
・おいしい豚を育てるために何を（遺伝子組替え）をしてもいいか

動物保護

・絶滅危惧種を保存するため、人間が手を出す（施設で保護す）べきか
・絶滅危惧種を保存するために、その天敵を殺してもよいか
・ペットは動物虐待にあたるか
・魚の養殖はよいか悪いか

犯罪

・虐待をする親の親権を一時停止すべきか
・罪を犯した14才～16才の少年を懲役に処するべきか
・少年犯罪を減らすために、処罰される年齢を10才に引き下げるべきか
・犬を引き逃げすることは犯罪か

社会問題

・男女平等の教育を推進するために、名大附属中学は体育を男女共学にすべきか
・地下鉄やバスの優先席を現状より増やすべきか
・高齢者の介護は、プロが行うのがいいか、身内が行うのがいいか

ゴミ問題、リサイクル

・ゴミを減らすべきか（ゴミを減らすことは本当に環境にいいか）
・公園にゴミ箱を設置（撤去）すべきか
・不法投棄を無くすために、処理費用を安くすべきか、罰則を設けるべきか
・グリーンマークは環境保護に本当に役立っているか
・教室にリサイクルボックスは必要か

エネルギー問題

・原子力発電に賛成か反対か
・自動ドアは必要か

スポーツ

・野球には天然芝と人工芝のどちらが適しているか

《表１・１年間の学習活動》

日　時			内　容	備　考
４月15日	木	５，６限	オリエンテーション（年間の活動説明） 各クラスで班結成 実行委員選出 論題とするトピックに関するアンケート	５限は両クラス合同 ６限は各クラスで展開
初回以降 ６月３日まで			・生徒･教員によるワーキンググループによるディベートの論題決定 ・国語の時間を利用してディベートの技術指導を行う	会議は授業時間外で行う

６月３日	木	5，6限	第１タームの学習開始 事前調査、資料作成など準備作業	図書室、PC室利用 両ＨＲ、美術、被服
６月17日	木	5，6限	チーム内での練習試合と準備補足	図書室、ＰＣ室利用 両ＨＲ、美術、被服
７月１日	木	5，6限	第１タームのまとめ（ディベート対戦と学習活動全体の振り返り）	両ＨＲ、美術、被服
９月９日	木	5，6限	第２タームの学習開始 事前調査、資料作成など準備作業	図書室、ＰＣ室利用 両ＨＲ、美術、被服
９月30日	木	5，6限	チーム内での練習試合と準備補足	図書室、ＰＣ室利用 両ＨＲ、美術、被服
10月14日	木	5，6限	第２タームのまとめ（ディベート対戦と学習活動全体の振り返り）	両ＨＲ、美術、被服
10月28日	木	5，6限	第３タームの学習開始 事前調査、資料作成など準備作業	図書室、ＰＣ室利用 両ＨＲ、美術、被服
11月11日	木	5，6限	チーム内での練習試合と準備補足	図書室、ＰＣ室利用 両ＨＲ、美術、被服
11月25日	木	5，6限	第３タームのまとめ（ディベート対戦と学習活動全体の振り返り）	両ＨＲ、美術、被服
１月20日	木	5，6限	第４タームの学習開始 事前調査、資料作成など準備作業	図書室、ＰＣ室利用 両ＨＲ、美術、被服
２月３日	木	5，6限	チーム内での練習試合と準備補足	図書室、ＰＣ室利用 両ＨＲ、美術、被服
２月17日	木	5，6限	第４タームのまとめ（ディベート対戦と学習活動全体の振り返り）	両ＨＲ、美術、被服
３月10日	木	5，6限	学年ディベート大会 各テーマ第４対戦の勝利チーム同士による対戦	両ＨＲ、ビデオ撮影 保護者参観

②論題決定実行委員会での検討

①のアンケートの結果をふまえ、意欲のある生徒を募り、ワーキンググループ「論題決定実行委員会」を組織した。両クラスから13名の立候補があり、その13名で委員会を立ち上げた。本委員会の目的は、アンケートの結果提出された論題を絞り込み、「生命と環境」というテーマに沿ったディベートができるかどうかを検討することである。委員会のスケジュールは以下の通り。

《表２・論題決定実行委員会のスケジュール》

４月23日	第一回論題決定実行委員会 ①「論題」についての学習 ②実行委員のクラス代表者決定 ③アンケート結果から論題候補を８つに絞る ④「定義・プラン」作成担当者決め
５月８日	第二回委員会　論題絞込み作業① ・８つの論題候補の「定義・プラン」検討
５月11日	第三回委員会　論題絞込み作業② ・「メリット・デメリット」検討 ・８つから６つの論題に絞り込む
５月25日	第四回委員会　論題の最終決定
５月26日	クラス代表の委員より論題発表 学年全体から質問・意見の受けつけ

委員の生徒にはまず、ディベートの論題がどのようなものであるかを概説し、実際にディベートの試合に取り組む時と同じように、メリット・デメリットなどを下調べしてもらった。また、その際、その話題が文献調査以外の調査方法を取りうるかどうかも考えさせた。１つの論題に対しそれぞれ複数の委員に担当させ、メリット・デメリットを挙げ、さらに議論のすれ違いを防ぐための定義やプランまでを作ってみた。その結果、情報が集まりにくいものや、片側の立場が著しく不利になる恐れがあるものを除外して、以下の論題に落ち着いた。

A介護が必要な高齢者の介護はプロが行うのが好ましいか、身内が行うのが好ましいか

定義　介護…日常生活が営めるよう手助けすること
プロ…介護を職業とする人で、依頼により派遣される人
身内…同居しているか、緊急時すぐにかけつけられる親族

プラン　介護の必要が無くなるまでの期間自宅で介護をする

B愛知県内のスーパーの自動ドアを全廃すべきである

定義　スーパーマーケット…食料品や日用品をセルフサービスで買える店
個人経営の店ではなくチェーン店とする
自動ドア…人の接近を感知して、または人の操作により左右に自動開閉するドア

プラン　2010年4月までに全廃する

C日本は中国産の野菜の輸入を禁止すべきである

定義　中国…中華人民共和国とする
野菜…冷凍野菜、加工品（ドライ、缶詰、瓶詰）、果物を除く生鮮野菜

プラン　2005年4月から半永久的に、日本政府・農林水産省が中華人民共和国産の生鮮野菜の輸入を禁止する

D家庭から出る粗大ゴミの不法投棄をなくすために処理費用を安くすべきである

定義　不法投棄…名古屋市で定められたゴミ出しの方法によらないで出すこと
処理費用…2004年4月現在の名古屋市でのゴミ処理費用とする

プラン　2005年4月から、名古屋市が家庭から出る粗大ゴミの処理費用を現在の半額にする

以上の論題は、委員からクラスに報告され、意見や質問を受ける期間を設けた。両クラスとも異議なく承認された。

委員会は放課後に行なったため、生徒に負担をかける活動になってしまったことが反省点である。しかし、生徒たちは時間をうまくやりくりをして、懸命に取り組んでくれた。委員として活動した生徒は、この後本格的に始まった学年での学習活動の中で指導的な役割を果たす生徒が多く、学習活動をリードしてくれた。

(2)1つのタームの学習の流れ

先述したように、2クラス80人の生徒を20人ずつの4つの「班」に分ける。その班は通年変わらない。しかし、タームが変わる（ひいては論題が変わる）ごとに、班の中で作る5人単位の「チーム」を組み替えていく。

班によって授業進度に差が出ないよう、「学習の手続き」というマニュアルを作成して、ほぼ同じ進度になるように配慮した。

授業時間としてカリキュラム上確保されているのは隔週木曜日の5，6時間目である。以下の学習の流れは第一時間目と第二時間目、第三時間目と第四時間目、第五時間目と第六時間目はそれぞれ同じ日の連続した時間にあたる。

【第一時間目】

①ワークシート類の配布

ディベート役割分担表	1枚
論題・定義・プランシート	1枚
ブレストシート	1枚
リンクマップ	1枚
発生過程分析シート	2枚
立論シート	1枚
質疑シート	1枚
第一反駁シート	2枚
第二反駁シート	2枚
フローシート	2枚
判定シート	1枚

②論題・定義・プランの確認

・この時点で論題、定義、プランについて疑問などがあれば出させ、どうするかを班全体で決めてシートに変更点を書かせる

③チーム分け

・班内を男女がほぼ同数になるよう5人チームに分ける

④チーム内での役割分担

・「ディベート役割分担表」を用い、対戦する試合時の発言パート担当、運営する試合時の役割分担を行わせる
・司会の生徒には試合時の台本を、会場設営の生徒には会場設営図を渡しておく

⑤ブレストシート、リンクマップ作成

・チームの対戦時の記録者に記録をさせ、なるべくすばやくアイディアをまとめさせる

【第二時間目】

①発生過程分析シート作成

・各自で（担当を決めて）作成させるなどの方法で作業を進め、最終的に練り上げたものは全員で共有する（全員が同じ内容のシートを持っている）状態に

する
・証拠、資料が必要なところを洗い出させる
・どこで、どんな方法で資料、証拠を集めるか考えさせる

②資料、証拠収集
・ＰＣ室、図書館を利用する
・なるべく実地調査を行わせる
・実地調査を行いたいチームが出てきたら、計画書を書かせる

【第三時間目】

①立論シート作成
・代表者だけが書くのではなく、全員が同じ内容を書いたシートを持っている状態にさせる

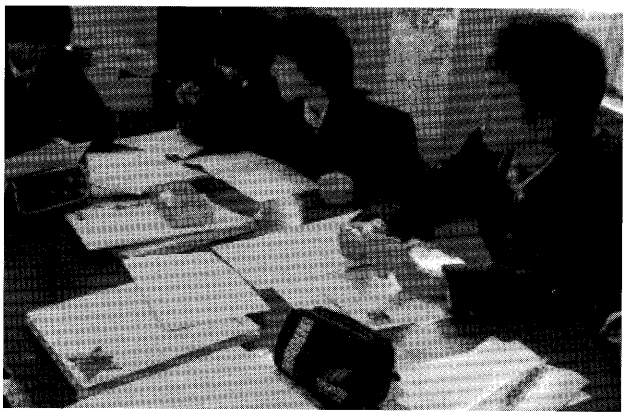
②質疑シート作成
・本番の練習として全員で話し合わせた上作成させる

③チーム内模擬ディベート
・２対２で肯定側、否定側に分かれ、練習ディベートをさせる（残りの１名は司会）
・自分たちが作った立論・質疑シートを使わせる

【第四時間目】

①模擬ディベートの内容検討
・これまで作成したシートの内容の問題点、弱点を洗い出させる
・証拠や資料が足りない部分がないか確認させる

②問題点の改善（再調査など）



チームでの検討作業の様子

【第五時間目】対戦

①対戦相手決め
・じゃんけんまたはくじで対戦チームとその立場、運営チーム、審判チームを決める

②会場設営
・第一試合運営担当チームの会場設営係に指示をださせ、全員で行う

③第一試合開始

【第六時間目】対戦

①第二試合開始

②会場現状復帰
・第二試合の会場設営係に指示をさせ、元通りになっているか確認させる

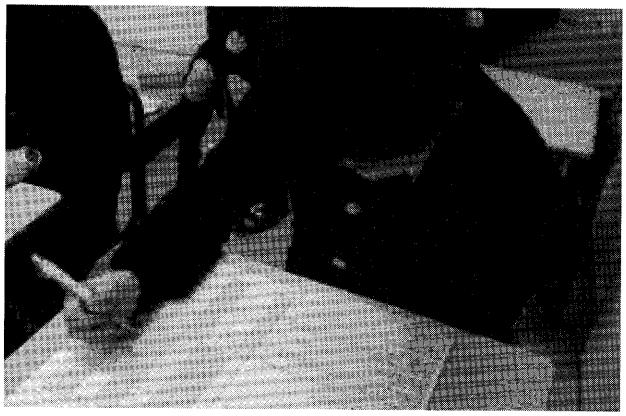
③意見文作成
・時間がなければ提出期限を決めて宿題にする
・論題をタイトルとし、自分で副題をつける
・最初に自分の立場（肯定、否定、どちらでもない）を明らかにし、必ずその主張には根拠をつけること

⑶ディベートの技術指導の過程

前掲表１で示したように、国語の時間を利用した。本校で使用している国語の教科書（東京書籍）にディベートの単元もあるが、試合の最後を自由論戦でしめくくる方式となっている。これまで指導してきた経験から言うと、議論がすれ違うことが多く、試合の経験が少ない生徒には難しいため、先に示した全国教室ディベート連盟の方式に従った。

国語の時間では、一通りの流れを体験させることを目的とした。マイクロディベートを見ると、必ずしもいい内容の試合ばかりではなかったが、ここで統一したディベートのルールをきちんと周知したことで、総合人間科の時間に各担当者のもとに分かれたときにも、比較的スムーズに学習が開始できた。

国語の時間内での学習の流れの概略を示しておこう（指導には約８時間を費やした）。



フローシートを書く生徒

①ディベート概説

用語や配布するワークシートの名称と用法を、指導者が作ったワークシートを使いながら解説した。

②ビデオ視聴

全国教室ディベート連盟東海支部制作のビデオ教材『初めてのディベート授業』を視聴し、試合の様子を学んだ。

③記録者体験・審判体験

試合の際に最も重要となるフローシートを使った記

録取りを、前記ビデオを見ながら全員で練習した。そしてそのフローシートに書いた記録を使って、勝敗をジャッジする審判の体験も行った。

④マイクロディベート実施

論題「名大附属学校の図書館はマンガを蔵書に入れるべきだ」について、全員で定義・プランを作る作業を行い、４人単位の小グループでディベートを実際に行った。

(4) 指導の留意点

①情報の徹底した共有化

ディベートという学習活動を採用した最も大きな理由は、コミュニケーション力を向上させられることにある。一般に持たれているイメージとは異なり、ディベートはただ言い張る力だけを高めるのではない。相手の言い分をきちんと聞き取る力も必要だし、チーム内で密にコミュニケーションを取って情報を共有していないと、まともな試合ができなくなる。下調べなどの段階でも、座席は必ずチーム単位になるようにするなど、チーム内でのコミュニケーションをとりやすくする配慮をし、そのような声掛けを意識的に行った。

②役割分担による全員参加

グループ活動では、一生懸命取り組む生徒とそうでない生徒の差が生まれやすい。それが生徒の間の不平等感を生み、ともすると学習集団全体の雰囲気が悪くなることがある。残念ながらこの年の取り組みでも若干名のさぼりがちな生徒が出てしまった。しかし、試合で全員が必ず発言するか記録を取るかしないとならなくすることなどで、参加意識を高めるように活動を組み立てた。

それから、試合の他にまとめの作業として意見文を書くことを課した。ディベートは二者択一の立場しか認めず、しかも自分がどちらの立場に立つか、個人の意志で選ぶものではない。それはゲームだからやむを得ないことではあるが、一方でそれぞれの生徒が自分としてはどう思うのかを表現する機会を設ける必要があると判断して設けたものだ。と同時に、個人単位で意見文を書かせることには、常に生徒に当事者意識を持たせるという意図でもある。

③多様な調査方法の奨励

本稿冒頭に書いたように、生徒にはさまざまな調査方法を実施させるよう、全教員で導いた。第一タームあたりではネットを含めた文献調査に偏っていたが、第三タームあたりから、インタビューをはじめとして、アンケートや現地での観察、ファックスやメールなどでの問い合わせなどが行われるようになった。アンケートは最も多くのチームに採用された方法だったが、プリントによるものの他、ネットの掲示板を利用する生徒も現れた。自動ドアの論題や輸入野菜のの論題では、生徒自身が手分けして各地のスーパーでの実地観察を行う例が見られた。また従来のフィールドワーク（インタビュー）も積極的に行うよう、各班で指導した。

統計類の利用も多く、各省庁から白書類のデータを利用したり、名古屋大学の図書館のOPACを利用して、他大学所蔵の学術雑誌に載っているデータを利用することもあった。

4 生徒の変容

(1)教員から見て

年間４つものタームを設け、ディベートをさせるというこの年度の学習計画は、実施前の段階では少し多すぎるかという気もしていた。何よりディベートという活動に慣れ、だれてしまうのではないかと心配していたのだが、むしろだれるというより慣れるのに適切な回数だったように思われる。第一、第二タームあたりではかなり危なっかしい取り組みぶりだった生徒が目立ったが、第三、第四タームでは、次第に要領をつかんで、試合の場面でもワークシート頼みでなく、自分の言葉で話せる生徒が増えてきた。

生徒の向上した点は、特に以下の２点で顕著だった。

①リサーチリテラシー能力の向上

調査方法が多様化したことについては、前章(4)の③に記したとおりである。その他には、タームを重ねていくうちにデータの出所、データがどのような方法で採取されたか、データの解釈の仕方は適切かといったところに目がいく生徒が増えてきた。データの扱いはディベートの試合で主張が成立するかどうかに大きくかかわってくるため、こうした観点が磨かれたようだ。いずれにせよ、一年の学習の末、複数のデータを批判的に読むということができるようになったと判断される。

②意見をまとめる力の向上

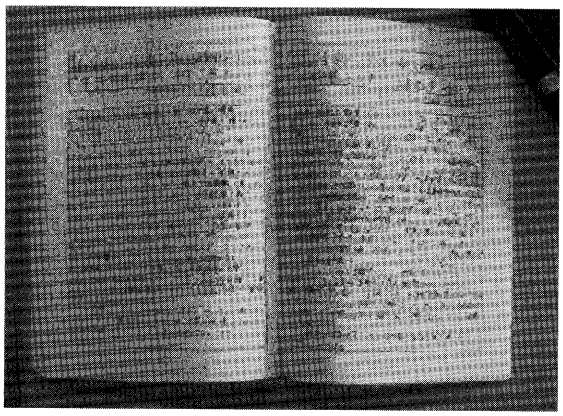
ディベートの中の限られた時間の中でスピーチを組み立てるという機会を何度も経てきたため、スピーチをまとめる力がついたように見受けられる。

一方、短い時間でとっさにスピーチを組み立てるのが苦手な生徒もいる。そうした生徒にも時間をかけてじっくりと考えさせるために、意見文の作業を課した。一人の生徒が一年間に書いた意見文は、それぞれの論題について１本、合計４本となる。ここでは分量以外に、論題に対する自分の立場を明らかにすることと、その根拠を明らかにすることという二つの縛りを設けた。ただし、立場に関しては「肯定・否定」の二者択一ではなく、「どちらでもない（中立）」というものも認めた。しかし、試合を経験してから書くためか、存外「どちらでもない」という立場で書いた生徒はいなかった。生徒が書いた全ての意見文は研究集録

の形で冊子にした。

こうした作業をした結果、例えば他教科の授業などで意見文を書かせる作業をさせても、戸惑う生徒がまったく見られなくなり、かつ以前より短い時間でまとめあげられるようになった。ただし、そこで挙げられる根拠が適切かどうかという判断力に関しては、まだ生徒により開きがある状況である。

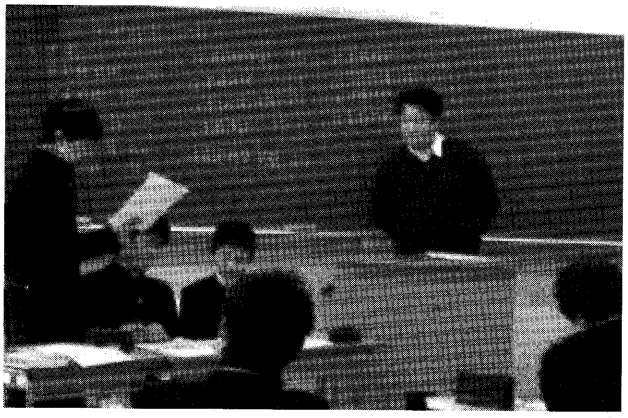
2004年度研究集録・表紙



研究集録の内容例

(2)生徒の感想

一年間の授業のまとめとして、生徒に「この一年の取り組みで何ができるようになったか」(技術的な側面)と「どのようなことを詳しく知り、どのようなことについて考えるようになったか」(「生命と環境」のテーマ的側面)の２点を自己評価させた。



試合の様子―質疑―

以下に生徒から寄せられたコメントを掲げておく。

①この一年で何ができるようになったか

《思考力に関すること》

・いろいろな側面から物事をみること、視野が広くなった
・どんなことにも疑問をもつこと
・適切な情報を選ぶ力が身に付いた
・推測する力（人が話す内容、ある事態から何が発生するか）がついた
・さまざまな情報を結びつけていくこと、まとめる力がついた
・物事や意見を冷静に見極める力がついた
・自分に直接関わりのないことでも自分のこととして考えること
・論理的に意見を組み立てること
・自分の考えがはっきりと分かった
・自分の考えの間違いに気づくチャンスがあった
・状況を判断し、適切な対応をする力がついた
・一つの課題を納得するまで追究する力がついた

《コミュニケーション力に関すること》

・協力すること、人と接すること
・短い時間で意見をまとめて話すこと
・相手の意見を取り入れながら話すこと
・根拠を述べることの大切さが分かった
・話を聞く力がついた、人の話を聞く大切さが分かった
・人を説得する話し方が身に付いた
・人前で話すことに緊張しなくなった、楽しくなった
・スピーチ原稿でなくメモで話すこと
・口げんかに勝つ力がついた
・限られた時間の中でもおちついて話ができるようになった
・大きな声で意見が言えるようになった

《その他》

・ディベートができるようになった
・メモを取る力がついた、素早くメモがとれるようになった
・資料を集める力がついた、調査の多くの方法が身に付いた
・インタビューのためのアポ取りが当たり前のこととしてできるようになった
・大学図書館など大きな図書館の利用法が分かった
・ピンチから立ち直る根性・集中力がついた
・資料の出典を控える意味がわかった

②どのようなことを詳しく知り、どのようなことを考えるようになったか

《全般的な内容》

・自分には関係ないと思っていたことも実は大きな関

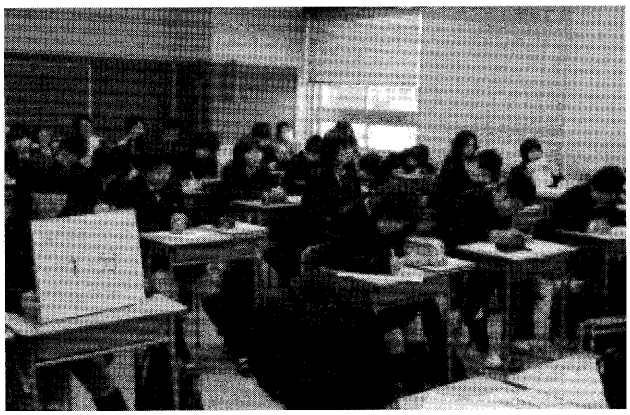
わりがあるということが分かった
・環境や周りの出来事について身近に感じられるようになった
・これまで考えてみなかったようなことが、論題を調べていくうちに分かった、論題に関わる知識が増えた
・日本には自分の知らない問題がたくさん発生していること
・論題が身近な問題だったので、調べたことを日常生活で生かすことができた
・同じ物でも知っているのといないのとでは全く違う物にみえてくる
・調べていくうちにもっと知りたくなった
・関係者の方に話を聞いてみると、マスコミで言われていることだけが全てではないと分かった
・環境問題の背景に全て人という存在があることが分かった
・社会問題、環境問題について深刻に考えるようになった

《不法投棄の論題に関して》
・物を買うときに捨てるときのことを考えなくてはいけないということに気づいた
・名古屋の現状を知って、こんなに深刻なんだと分かった
・アンケートの回答（自分も不法投棄をしたことがあるという内容）を見て衝撃を受けた

《輸入野菜の論題に関して》
・値段だけで判断してはいけないことが分かった
・日中関係の大切さを考えるようになった
・農薬の役割や消費者の意見を知ることができた
・中国産野菜が問題になっているということを初めて知った
・身近な問題に政治や経済のことが関わってくることを知り、単純な問題でないことが分かった

《自動ドアの論題に関して》
・便利なだけがいいわけでないと考えるようになった
・自動ドアが時には危険だということが分かった
・お年寄りや子どもの立場でものを考え、私たちの普通の生活が立場が違う人にとって大変なことになることがあることが分かった

《介護の論題について》
・人生について考えるきっかけになった
・実際にＦＷをして介護の現状がよく分かった、ホームヘルパーの役割についてよく分かった
・この論題に取り組んで、人を助けられるようになった
・これまでプロに任せるのがいいと思っていたが、本人にとっては身内がいいと思うことがあるということが分かった。プロと身内が協力して介護をすることが大事だと思った。



学年ディベート大会・会場の様子

(3)まとめと反省点

上記の生徒のコメントに見るように、思考力、コミュニケーション力、リサーチリテラシーの能力について、肯定的な自己評価を行っている。生徒による自己評価とその内実の懸隔がないとは言えないが、今年度の取り組みに一定の成果が出たと考えられよう。

一方で、生徒の中には例年のような個人研究方式に対する根強い支持もある。フィールドワークに関しては、今年度の取り組みでも必要に応じて行わせたし、むしろ個人単位での訪問でなかったために、個々の生徒への負担感は少なく済んだようで、生徒からもおおむね好評であった。しかし、テーマ設定に関しては、例年の個人研究方式の自由さはない。このことに関しては、特に意欲の高い生徒からの不満があった。翌年の中学三年ではやはりグループ単位の課題探求となるため、学年の六カ年の学びの過程という中ではいささかバランスを欠いたプログラムであったかもしれない。

指導する側の問題として、今回の学年担当者にもディベートを指導する経験に差があった。学生時代から自分自身ディベートを本格的に体験してきた教員がいる一方、今回全く初めてという教員もいた。そのため、それぞれの教員の持ち味を生かした指導ができなかったというのが残念な点である。学習指導もワークシート主体のものになってしまった。ディベートの全てのパートのスピーチは、ワークシートの空欄部分に書き入れていくとスピーチが完成する。最初は、このフォーマットにがちがちに縛られて、形式的な答弁になりがちだった。ディベートが窮屈なものという印象を与えてしまった可能性がある。もっとも、生徒自身は回数を重ねるにつれ、ワークシートから自立してスピーチができるようになってきたのが幸いであった。本年度の取り組みは、本稿１章に示した目論見をひととおり達成することができたと判断される。本年度の取り組みを、本校総合人間科の新しい学習プログラムとして提案し、更なる発展を図って

いきたいと考えている。

（文責：佐光美穂）

《参考文献・ビデオ》

・全国教室ディベート連盟編『中学／高校はじめてのディベート授業―教科書を活用したディベート・シナリオ集』（学事出版、03.8）
・上条晴夫・池田修『中学校・高等学校ディベートワークシート』（学事出版、97.1）
・メディアクリエイト編『中高校生のためのディベート入門（ＶＨＳ）』（学事出版、96.2）
・全国教室ディベート連盟東海支部編『中学／高校はじめてのディベート授業（ＶＨＳ）』
・松本茂『日本語ディベートの技法』（七宝商会、01.12）
・茂木秀昭『ザ・ディベート』（ちくま新書、01.4）
・三角洋一他編『新しい国語２』（東京書籍、04.2）